NPO 法人が主導した遠隔授業支援と進級の実現

「休学せずに同じ学年の友だちと一緒に進級したい」切なる思いの実現に向けて

NPO 法人の立場から

現実と思いと課題を知ってもらいたい

NPO 法人未来 ISSEY は、香川県を拠点に病気を抱える子どもとご家族の支援を行っています。スタッフの多くが子どもの闘病生活を経験したピアです。

病気のために学校に通えなくなった高校生のもつ「転校や休休学をせず、自分の学校でずっと学び続けたい・友だちや先生と交流したい」という思いを、ピアとして、たくさんの出会いの中で痛いほど知っています。だからこそこの願いを実現させる。積極的にご本人とご家族と学校をつなぐ活動を行ってきました。

その第一歩が県議会・県子ども家庭課・県教育委員会の皆様と共に取り組んだ「長期入院の高校生の配慮事項」についての学習会開催です。全国の先進事例を知り、検討の結果県教育委員会は「学校長の裁量により生徒さんの状況に合わせてオンラインでの学習等が可能となるよう配慮する」ことを打ち出しました。

この配慮により、長期入院中の高校生の「学び」に変化が起きます。

単位認定、進級!

公立高校普通科 2 年生（当時）女子 A さんは、病気の治療のために約1年間の入院が決まり、病気に対する不安と同時に、学校に通えず出席日数不足で進級できない可能性があることが A さんにとって最も大きなショックとなりました。

公立高校は進級の条件の1つとして「年間授業日数のうち出席日数が3分の2を超える」ことを上げています。しかし長期入院では直接学校に行くことができません。

「休学せずに同じ学年の友だちと一緒に進級したい」という A さんの強い願いを受け、お母様は学校への依頼と同時に病棟師長にも相談します。ここから未来 ISSEY に相談内容が伝えられたことにより、すぐさま教育委員会と高等学校に「学科の特徴や教科に応じた学習方法の工夫・教員の定期訪問や授業の実施・校長による遠隔授業の学習状況等の総合的判断による単位認定」などの調整が行われました。

A さんは学校長の判断により、実技教科を含むすべての授業とホームルームに「Microsoft Teams」で参加することができるよう配慮されました。入室・退室（出欠）を音声で確認して画面 off でも可能、教室移動などはクラスメートが会話を楽しみながら行ってくれました。

試験は学校から先生が試験問題を病院に持参、病院内での試験を見守りました。試験用紙を開いていなければ体調不良で後日に実施してもらうこともありました。

授業だけでは不足する学習時間を確保するため、NPO 法人の企画する毎週土曜日 2 時間ずつの学習支援を有効活用しました。学生ボランティアとともに行う学習は心の支えにもなりました。

このような1年間をご本人とご家族が乗り越えられ、出席日数の確保・進級に必要な単位取得が完了し進級認定が行われました。治療も終えて退院後、高校の新 3 年生として学校生活を楽しんでいます。

この経験を振り返り、お母様は「私たち当事者と学校・教育委員会・病院の間を密につなぐために、未来 ISSEY が連絡調整に動いてくれたことが何より大きな支えでした。初めてこのような状況に陥った不安な家族の代わりに、関係各所に説明してくださり感謝しています」と話しています。

遠隔授業で友だちと学ぶ

私立高校の B さんは学校の授業を病院から学習支援ロボットで視聴しています。
病気の治療のために中学生で入院し中学生の間は院内学級で学びましたが、
治療を受けながら高校進学の問題が迫ってきます。
B さんの願いは「友だちと一緒に留年せずに学校に通い続けること」。
入院していてもオンラインで高校の授業を受けることができ、単位取得と進級ができる学校を中学の先生とも相談して学校を探しました。そして対応してくれる私立高校に出会い、受験して合格します。

「オンラインでの学習がよりスムーズに行える方法を知りたい」という B さんご家族の願いを受け、病棟師長は未来 ISSEY につなぎました。入学式に間に合うよう、春休み中に同団体が所持する学習支援ロボット「kubi」を紹介、スタッフ・B さん・お母様・学校の先生方も交えて使用について数回の協議ののち、入学式から使用が開始されました。未来 ISSEY からはロボットとタブレット 2 台を無償貸し出しし、B さんの学習を支えています。

B さんは実技教科を含むすべての授業とホームルームにロボットで参加することができるよう学校から配慮されました。「kubi」は自分で板書を見やすく角度を変える、ズームで拡大するなどの操作ができるため、授業中先生や友だちに微調整を頼まなければいけないというストレスがありません。
教室移動などの時は B さんのロボットを移動させてくれる担当のクラスメイトがいて、楽しく交流することもできています。
試験の時も病院内でロボットをつないで同時に受けることができています。大切な行事・試験日などに欠席しなくて済むよう、体調管理に気をつけているそうです。
ロボットのおかげで、入学前の孤立感や不安が軽減した、とおっしゃっています。現在他県での治療を選択されましたが、そちらの病院にも院内学校等のサポートはありません。しかし引き続きロボットを使用して学校とつながり、変わらず授業を受けることができています。
お母様は「病院で未来 ISSEY がロボットを使った小さいお子さん向けイベントをしていることを知っていました。でも高校生向けに授業のサポートとしても活用させてもらえると思っていませんでした。看護師長さんから未来 ISSEY のロボットの説明を聞いてみませんかという勧めがあって、本当に恵まれています。」と話しています。

活動の中で NPO 法人として、高校生の学ぶ権利として「オンラインでの授業参加とその評価・進級」が認められていること、そしてその制度が漏れなく利用されるべき対象者の方々に伝わること、対象者の方々が知らなくても関係各所にきちんと周知されて確実に実施されることが重要だと感じています。
また学び方にはいろいろな形があります。オンラインでの授業参加1つでも、ロボットを活用してより効率よく学べることはとても大切です。
それらの広報・連絡調整や提案を行う NPO 法人・支援団体の存在と地道な活動は欠かせません。また今後、同じような経験をしている高校生同士が「直接会う・または身近に存在することを知る」機会を作り出すことの必要性も強く感じています。

特定非営利活動法人
未来ＩＳＳＥＹ

子どもたちが病気になっても、子どもとそのご家族と周りの人たちが希望を持ち、前向きに立ち向かえることを目指す団体である。
スタッフがピア（経験者）という立場を生かした「寄り添う」気持ちを大切に、子どもたちの教育支援とそのご家族に寄り添う様々な活動をしている。
１０年後、病気に悩む子どもたちが私たちとともに活躍する社会の実現を目指す。

未来 ISSEY のあゆみ

2019 年 3 月	交流支援ロボット無償貸し出し事業　開始
2019 年 6 月	HP 開設
2019 年 10 月	初の病棟内イベント・ハロウィンパーティー開催
2019 年 11 月	公益財団法人ベネッセこども基金 2019 年度「重い病気を抱える子どもの学び支援活動助成」決定 グッドブラザー（小児病棟ボランティア）事業　～ 2022 年度
2019 年 12 月	広報動画「私じゃない私に～きょうだい児のものがたり」制作
2020 年 2 月	グッドブラザー定期活動開始（四国こどもとおとなの医療センター）
2020 年 6 月	グッドブラザー定期活動開始（香川大学医学部附属病院）
2021 年 2 月	広報動画「ともだち～きょうだい児のものがたり」制作
2021 年 4 月	香川県小児慢性特定疾病児童等自立支援事業 高松市小児慢性特定疾病児童等自立支援事業
2023 年 5 月	居場所「みらいキューブ」開設＆自立支援事業「スキル獲得講座・スキルマルシェ」スタート

家庭・高校・医療機関、それぞれの理解と支援が欠けることなく得られた

県立高等学校の立場から

病院内での学業を関係機関との連携によって支援をすることで、１年近く入院した生徒が進級することができた事例。対象生徒は香川県の公立高等学校2年生。

生徒状況

1年次は学業部活動ともに意欲的に取り組み2年生の春に長期入院が必要な病状であることがわかった。生徒は学習意欲がとても高く成績も良好、運動部に所属。

支援の経緯と実施

○学校としての支援案を作成

校内で当該生徒にかかる支援の方向性を検討し関係する教員と管理職で原案を作成。未来ISSEY(NPO) の協力で類似の他県情報等を得て問い合わせ等して検討した。学校支援案に対して意見聴取し、生徒本人、保護者、学級担任、授業担当職員から同意を得た。

○医療関係者との調整

あくまで治療優先で体に過度な負担がかからないように配慮し、医療機関との綿密な連携のもと、本人や家庭の意見をききながら可能な範囲で病室内で学習活動を進めることとした。タブレットで学校と病室をつないでのオンライン授業を行う。

○県教委との協議

校長が県教育委員会に説明にいき生徒の状況と本人と保護者の意向を踏まえた本校の支援方針案について説明した。高校教育課内で協議をしてもらい、いくつかの注意点を確認して方針を固めた。現時点での規則的なことこれまでの事例を確認し単位修得と進級に向けて支援を開始した。

○病院の対応

本人の意志の強さと病室での学業が治療にも効果的な活動であるとの判断からチームでの対応をしてくれた。地域連携室の職員から小児科の師長が窓口となって連携をとり、ケース会を開くなどして共通理解を図りながら進めてくれた。

○家族のサポート

家庭の意識が高く、母親がほぼ付ききりで熱心に学業支援にあたった。

単位修得の支援方法

〇授業等
　授業をカメラを通して視聴し、病室から授業に参加する形で出席を認める
・出欠確認：朝のホームルームでタブレットを使って出欠の確認をする
・授業時間：タブレットで毎時間、同時双方向でのやりとり
・教室移動：同じクラスの生徒がカメラの運搬をして適切に設置する
・特別活動：全校集会や講演会などの活動の際にカメラで撮影して送信する

〇定期考査
　試験問題は受験前に密封して学級担任等が病院に運ぶ。室内に大人がいる環境でタブレットのカメラで手元を映しながら試験を実施。カメラを通しての試験監督、終了後にカメラの前で封じて担任等が回収、学校に持ち帰り教科担当が採点。実技教科は別途課題によって評価した。

効果的な支援ができた要因

〇本人
　最も大きな要因は当該生徒の学業に対する意欲が高く進級に向けた意志が強かったこと

〇周囲の人や組織
　所属する団体や人の理解と支援がそれぞれに欠けることなく得られたこと
・家庭：本人の意思を尊重し、方針を理解して関係各所ともつながりとても熱心だったこと
・県教育委員会：前例にとらわれることなく学校の支援方針を認めてくれたこと
・高校の教員：学級担任、授業担当者、情報機器担当者それぞれがとても協力的であったこと
・高校の生徒：意識が高く教室内外でのカメラの移動やその他の理解と配慮ができたこと
・医療機関：主治医、窓口、サポート担当が共通理解して配慮のある対応をしてくれたこと
・未来 ISSEY(NPO)：医療機関とのつなぎ、生徒保護者のフォローや情報提供等してくれたこと
初めてのことであったため、細かなことでもその都度対応を検討し校内及び関係各所との共通理解を図りながら進めていった。生徒だけでなく関係者にとっても価値ある活動ができた。

泉谷俊郎

広島大学理学部で植物生態学を学ぶ。香川県に高校の生物教諭として採用され県内高校、高校教育課など歴任し校長として定年退職。現在は東かがわ市教育委員会事務局で教育連携コーディネーターを務める。自然体験活動指導員、公認心理師。

「わたしの目にはあなたは高価で貴い」人には望むように生きる権利がある

病院小児科の立場から

香川大学医学部附属病院小児科には毎年、小児がん患者さんが入院してきます。小さい子ですと生後一か月以内の新生児から大きいと高校生までです。特に小学生以上のお子さんですと、今まで元気に学校に通い、友達と楽しくすごしてきた日常から、病気になると一変して病院の一室で一日中過ごすことになります。検査の痛みに耐え、治療の副作用で苦しむ生活が１年近くも続くのです。

私は、特に入院する高校生は三重苦だと思っています。一つ目は病気による生活の制限です。病院から長い間出られず、食事もトイレも自分の部屋で済ませます。生活の自由がすべて奪われるのです。二つ目は友達との関りが減ってしまうことです。もちろんSNS でつながることはできますが、やはり対面で話したり、一緒に活動する機会が失われることは、子どもにとって大きな損失だと思います。そして三つ目は高校生特有の問題ですが、授業を受けることができず、留年してしまうことです。せっかく入学した高校で学生生活を楽しむこともできず、留年を強いられて同級生と一緒に卒業ができないなんて、こんな辛いことがあるでしょうか。

私はこの三重苦のうち一つでも取ってあげられたらと思いました。病院は病気の治療をするところですが、同時に子どもの人生が少しでも良くなるようできるだけサポートをするところだと思います。毎週、金曜日の午前中に小児科病棟の回診を行いますが、病気の治療がうまくできて元気に見えるお子さんもいますが、抗がん剤の副作用で苦しんだり、寝込んだりする姿を見てきました。またその中でゲームをしている時間もありますが、教科書や問題集を使って一生懸命に勉強している姿も見てきました。今までも、がん治療で感染症にかかってはいけないので、部屋から出られない中学３年生の受験を病室でできるようサポートしてきました。今回も高校生が病室で授業や試験を受け、進級できるように、県教委の教育長に理解して頂き、高等学校の教頭先生や担任の先生と面会し、小児病棟を見学して頂いたりして、インターネットを利用した授業をリアルタイムで受講可能にしたり、看護師さんに試験監督をして頂いたりしました。

私の好きな聖書の一節に「わたしの目にはあなたは高価で貴い」という言葉があります。どんな人でも、苦しい治療の中であっても、人は高価で貴いのだから、その人が前向きに望むように生きる権利があり、その望みを叶えるよう、みんなで助ける必要があると思います。今回、みなさんの理解と協力のおかげで、高校生の患者さんが治療も進級もできて、心から嬉しく思います。本当に有難うございました。

日下隆

高松市出身。
1991 年香川医科大学卒業。2014 年より香川大学医学部小児科教授。小児科専門医・指導医、周産期（新生児）専門医。好きな言葉は敬天愛人。趣味は水泳、書道。毎週、日曜日にキリスト教会に通っています。